岡山理科大学紀要 第42号 B pp. 21-40(2006)

西南中国における伝統的土器づくりの変容

－中華人民共和国雲南省西双版納傣族自治州の伝統的土器づくり村－

徳澤啓一・小林正史*・長友朋子**

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

*北陸学院短期大学コミュニティ文化学科

**大手前大学史学研究所

(2006年10月2日受付、2006年11月6日受理)

1．はじめに

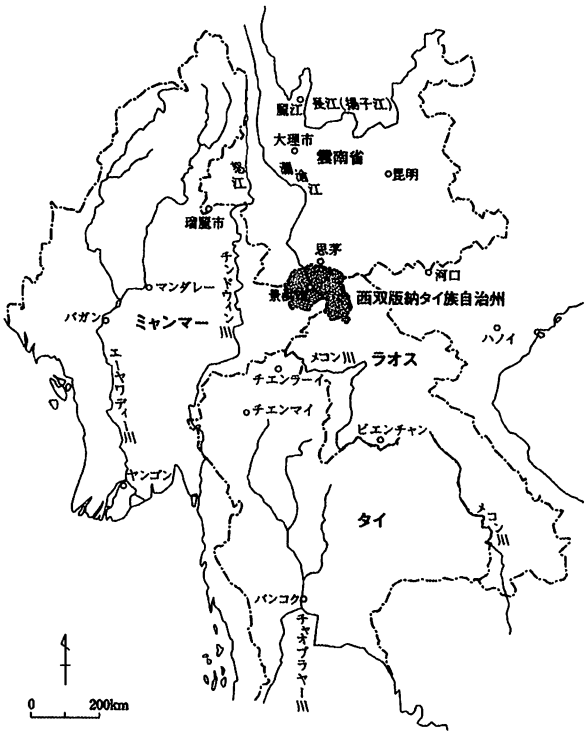
中華人民共和国雲南省西双版納（シプソンパンナ）傣（タイ）族自治州では、一部の少数民族が伝統的土器づくりを伝承している（張1959ほか）。伝統的土器づくりは、複数の少数民族で確認できるものの、少数民族単位、あるいは、郷・鎮といった小地域を単位として、その技術的内容が異なる（李・朱2005ほか）。

傣泐（タイ・ル）の土器づくりを見ると、景洪（ツェンフン）市と勐海（ムンハイ）県では、野焼き方法が大きく異なる。景洪市では、高密閉型の「雲南型」の泥窯が採用されるが（張1959ほか）、勐海県では、低密閉型の覆い型野焼きである（徐1983ほか）。「雲南型」の泥窯は、稲藁を葺き下ろし、泥漿を塗り込めることで、覆い天井全体を閉塞する構造である。空気交換を抑制し、急激な昇降温を回避する技術的な特徴がある（傣族制陶工芸総合考察小組1977）。

今回、この「雲南型」の泥窯を実見するため、西双版納傣族自治州における伝統的土器づくりの実態調査を行った。景洪市及び勐海県の４つの村寨において、粘土紐積上げ成形や叩き成形等の伝統的土器製作技術を観察することができた。ただし、雨季と重なって、泥窯を実見できなかったものの、土器づくり職人から伝統的土器づくりの仔細を聞きだすことで、「雲南型」とされる泥窯が、傣泐、あるいは、雲南省や西双版納傣族自治州という単位ではなく、景洪市周辺で発達した野焼き方法であることが判明した。

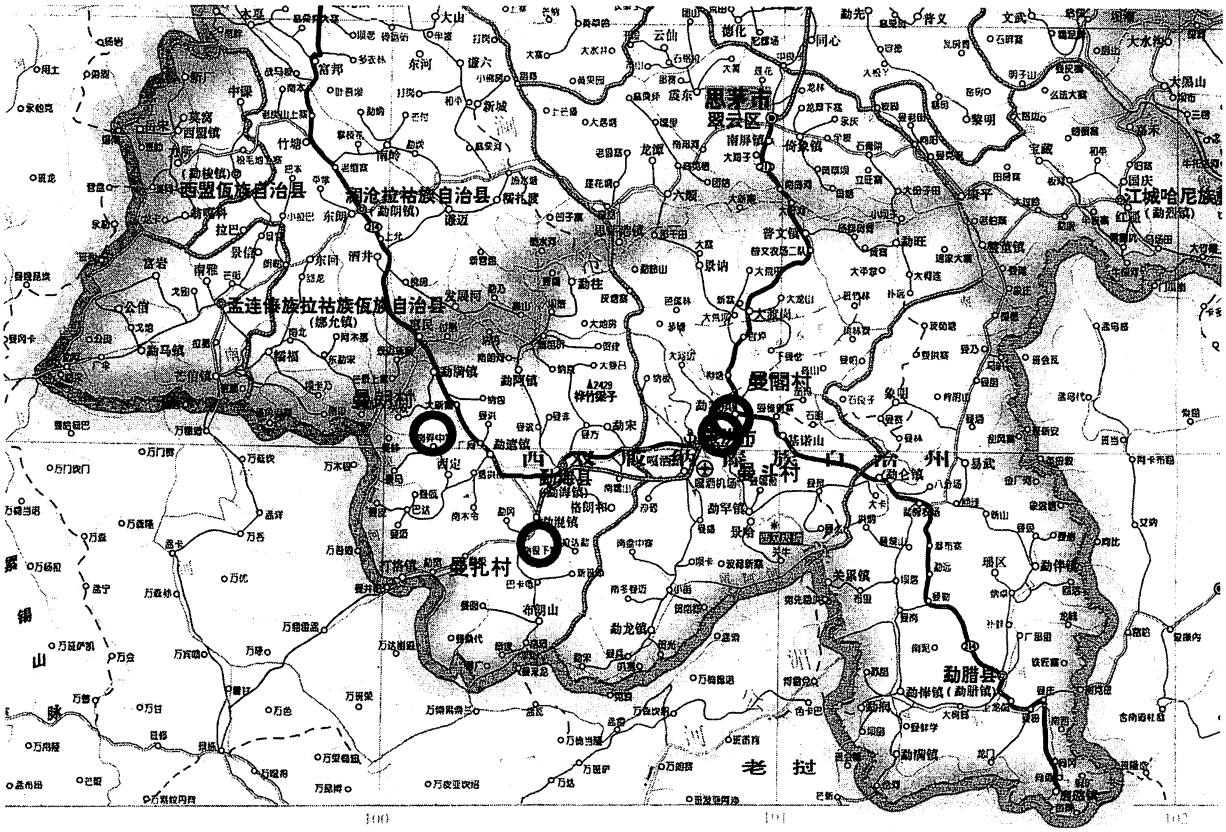
また、土器づくり世帯の生業等の付帯的事項を聴取することで、中国の現代化と同調しながら、傣泐の生活様式が変化し、伝統的土器づくりの生産様式や技術的内容も大きく変容したことを理解することができた。

こうした現象は、中華人民共和国成立以降の国内移民政策に伴って、漢族が大量移入し（Ma1993ほか）、景洪市では、漢族が人口主体となり、着々と都市計画が策定されたことによる（瞿1995ほか）。また、副食を中心とする食事様式となることで、中華鍋、電気釜が一般化し、調理形態も大幅に変更された。伝統的土器づくりの変容は、傣泐の生活様式が現代化されたことに原因する（長谷川2003）。とくに、食事様式の変化は、土鍋をはじめとする日常什器の存亡に関わる事態となっている（周1979ほか）。



第１図　西双版納傣族自治州の位置（菅野2001）

本稿では、景洪市及び勐海県の４つの村寨における土器づくり職人に対する取材をもとに、製作技術や生産様式を整理しながら、伝統的土器づくりの変容をまとめてみたい。また、現代化をはじめとする中国事情や社会的脈絡にあわせて、西双版納傣族自治州における伝統的土器づくりの将来を見据えてみたい。



第２図　景洪市及び勐海県における土器づくり村　（中華人民共和国省級行政単位系列図雲南省地図1/1,380,000）

２　シプソンパンナ、傣族、そして、傣泐

中国では、55の少数民族が居住し、それぞれが自然環境に適応しながら、棲み分けにあわせた生産基盤や生活様式を確立し、独自の伝統文化を展開している。

雲南省は、ベトナム、ラオス、ミャンマーと国境を接しており、邊疆と定義されている（長谷川2003）。

雲南邊疆では、漢・チベット語族の言語学的系統にある彝（イ）族、白（ペ）族、哈尼（ハニ）族、壮（チワン）族、傣族などの25の少数民族が共生している。

このうち、傣族は、宋、元、明において、白衣（パイイ）、白夷、清において、擺夷、以来、漢族からは擺衣と称されてきた（刘岩1999）。言語学上では、カム・タイ語群チワン・タイ語系に属しており、ベトナム、ラオス、タイ、ミャンマー、インドに分布するタイ語系諸民族と出自を同じくし、東南アジア北部の多数派民族として、政治的・経済的・文化的な紐帯を有してきた。

しかしながら、中華人民共和国成立後、“シプソンパンナ”は、1950年、中国共産党の支配下に入り、1953年、西双版納傣族自治区、1956年、西双版納傣族自治州と再編され、伝統的政体が解体された（加藤2000）。また、民族識別工作では、国内のタイ語系諸民族が包括され、傣族として固定化された。その後、漢族が大量移入することで、雲南邊疆は、国内植民地化が進行したものの、傣族は、同化融合せず、その民族性を保持したまま、傣族と漢族、そして、傣族以外の少数民族という民族間関係、つまり、複合社会が形成された。

また、国境線で寸断されたタイ語系諸族は、対外開放政策によって、瀾滄江（ランシャンジャン）－メコン川総合開発をはじめとする邊疆開発及び邊疆（国境）貿易、そして、邊疆観光が展開することで、ラオス・ミャンマー・タイとの経済的連繋が強化されている。かつて、「黄金の三角地帯」と称された邊疆地帯は、「成長の四角形」と躍進を遂げており、タイ語系諸族の紐帯を新しい形で取り戻しつつある（菅野2001）。

傣族は、地理的分布、歴史的経緯、文化形成において、傣泐、傣那（タイ・ナ）、傣雅（タイ・ヤ）、傣繃（タイ・ペン）の４支系に分けられ、雲南省では、徳宏（トホン）傣族景頗（ジンポ）族自治州、西双版納傣族自治州、臨滄（リンツァン）地区耿馬（コンマ）傣族佤（ワ）族自治県・思茅（スマオ）地区景谷（チンク）傣族彝俗自治県、思茅地区勐連（ムンリエン）傣族拉祜（ラフ）族佤族自治県、新平（シンピン）彝族傣族自治県、元江（ユアンジャン）哈尼族彝傣族自治権、金平（キンピン）苗（ミャオ）族傣族自治県等において、各支系が集住している（C・ダニエルズ2001）。

このうち、西双版納傣族自治州では、傣泐の伝統的政体が形成されていた。今日でも、総人口に占める割合や地域経済における優位性を見ても、傣泐が支配的民族であることに変わりない。傣泐は、13世紀以降、それぞれの盆地を単位として、盆地国家の勐（ムン）を形成した。勐は、血縁関係を基盤とする村落共同体の曼（マン）から編成されている。この勐が複数連合することで、国家的統合が成立していた。これが、盆地国家連合という伝統的政体であり、その一つが"シプソンパンナ"であった。これが、西双版納傣族自治州の中心的地域の下敷きとなっており、景洪市は、その中心的勐"ムンツェンフン"であった（加藤2000）。

"シプソンパンナ"では、中国歴代王朝やビルマ（ミャンマー）の政治的・軍事的な影響下にありながら、また、土司制度や改土帰流という直接的・間接的支配を受けることもあった。しかしながら、実体として、盆地国家連合が分裂と再編成を繰り返しながら、19世紀中葉まで、中心的勐"ムンツェンフン"を盆地国家連合の盟主とする伝統的政体が存続した。

傣泐の伝統的な生業基盤は、水稲耕作であり、景洪盆地をはじめとする雲貴高原西部の山間盆地を貫流する流沙江―瀾滄江水系の肥沃な平野部において、主食である糯米を栽培してきた。水辺に居住する傣族は、水擺夷（シュイバイイ）ともいう。一方、山地民族の伝統的生業は、刀耕火種、つまり、焼畑であり、陸稲や雑穀を栽培し、１年中輪作していた（尹1991）。

"シプソンパンナ"では、各勐において、封建的領主"ツアオペンディン"によって、支配民に対する租税の収奪が行われていた。米及び米以外の食料品、日用品が貢納され、各種徭役労働が課されていた。勐内部では、支配者層である王及び王族"ツァオムン"、官僚貴族"ポーラーム"、被支配者層である公民（一般農民）"タイムン"、非公民（従属民）"クンフンツァオ"という身分制的秩序が敷かれていた。また、"クンフンツァオ"の下位範疇は、さらに、"レークノイ"、"ホンハーイ"と分化されていた。身分階層に応じて、各曼が編成され、曼や戸といった社会単位で徭役が課されていた（第１表）。"クンフンツァオ"は、王族所属田における耕作徭役をはじめとして、私的奉仕や家内労働にも従事させられていた（加藤2000）。

こうした支配者層に対する直接的奉仕の性格をもつ多種多様な徭役に従事してきたことこそが、"シプソンパンナ"の手工業生産を発達させたのである。伝統的土器づくりをはじめとして、紡績、製糖、製紙等が展開していた。徭役体系が具体的かつ詳細に定められているものの、制陶、つまり、土器づくりに関する項目は見当たらないが、"ムンツェンフン"の勐泐王宮で土器づくりが行われていた事実がある。

第１表　盆地国家"勐"の徭役・貢納（加藤2000）

＜１＞　ある範疇の人々だけに課されているもの

1-1　王族だけに課されているもの

・ツァオペンディンの警護

1-2　タイムンだけに課されているもの

・竹のざるを編むこと／草むしり／「架火」／家の修理／水浴び場を作ること／テーワダー（守護霊）の番をする（「守」）こと／ツァオペンディンのかわりに商売をすること／人を殺すこと？／子供のお守り

・天秤棒の上納

・「矛槍」を持つこと／カーラサブ（楽器の一種）をたたくこと

・道路修理／橋の修理

1-3　レークノイにだけ課されているもの

・馬を飼うこと／赤牛の雌牛を飼うこと／「搾糖」（砂糖きびをしぼること？）／（砂糖きびの汁を）煮詰めて砂糖を取ること／縄をなうこと／「草拝」を編むこと／たきぎをとること／草を刈ること／米をつくること／飯を炊くこと／「糖飯」を煮ること／食事のための買い物をすること／料理を作ること／水汲み／茶を入れること／灯をつけること／扇であおぐこと／顔や足を洗う水を運ぶこと／ツァオペンディンの妻に仕えること／トゥロン（僧侶？）に使えること／厠を建てること／花園菜園の管理をすること／犯罪者の見張りをすること／王田の管理をすること／養魚池の管理をすること／赤牛を飼うこと／駄牛を使うこと／馬夫を務めること／荷かつぎ人夫をつとめること／官租を家畜にのせて運ぶこと／手紙を届けること／米を運ぶこと／ワットロン（「大仏寺」）のトゥ（僧）の食事を世話すること

・船（をつなぐ）縄を上納すること／筍を上納すること／竹を薄く割ったものを上納すること／しゅろの葉を上納すること／びんろうを上納すること／果物を上納すること

・銀の刀を背負うこと／袋を背負うこと／「弁宛」という儀仗を持つこと／「売乃」という儀仗を持つこと／旗を持つこと／どらをたたくこと／大砲をうつこと／花火をあげる？こと／ラッパをふくこと／歌を歌うこと（儀式などの際）

1-4　ホンハーイにだけ課されているもの

・布を織ること／寺を掃除すること／テーブルを運ぶこと

・バナナの木を上納すること

・「金包」を管理すること／金の皿を持つこと／金の傘を持つこと

＜２＞　複数の範疇の人々に課されているもの

2-1　タイムンとレークノイに課されているもの

・配膳／サナームの建物の建築

・竹を上納すること

・「版保」という儀仗を持つこと／大刀を持つこと（儀式の際）

2-2　タイムンとホンハーイに課せられているもの

・赤ん坊の世話／子供のお守り

・金の刀を持つこと（儀式の際）

2-3　レークノイとホンハーイに課せられているもの

・水牛を飼うこと／象を飼うこと／塩を煮詰めて取ること／糸を紡ぎ、布を染めること／茶を運ぶこと／雑務をすること／使い働きをすること／全ムンの官租を運ぶこと

・生の魚を上納すること／「酸魚」（なれずし）を上納すること

・槍を持つこと／大印を背負うこと／孔雀の尾を持つこと／船を漕ぐこと（儀式の際）

2-4　タイムンとレークノイとホンハーイに課されているもの

・ツァオペンディンの母に仕えること／家を建てること／倉庫を建てること／トイレを建てること・物干し場を建てること／「守家」（留守番？）／倉庫の管理をすること

・鶏を上納すること

3　傣泐の伝統的土器づくり

“シプソンパンナ”における伝統的土器づくりは、曼閣（マンク）村の岩さんのインタビューによって、勐泐王宮に限られるが、具体的内容を知ることができた。また、傣族の土器づくりは、少なくとも、14世紀まで遡ることができる（唐2000）。明の洪武年間に成立した『百夷伝』において、「器皿丑拙尤甚、尤水桶、木甑、木盆之类、惟陶冶之器是用。其宣慰用金银、玻璃等器、其下亦以金银为之。」と土器づくりの記述が見られる。本来ならば、傣族の制陶史とその研究史を整理する必要がある。しかしながら、紙幅の都合上、これを割愛しなければならない。本稿では、2006年８月、景洪市及び勐海県の４つの村寨において、伝統的土器づくり職人に対する聞き取り調査を敢行し、実際、土器づくりの様子やデモンストレーションを実見したので、これをもとに、中華人民共和国成立以降の傣泐の伝統的土器づくりの変容、とくに、現代化に伴う動向を取りまとめることにしたい。

３－１　景洪市（允景洪（ユンジンホン））

３－１－１　曼閣村

土器づくり世帯　州都景洪市の近郊農村である。100世帯が居住し、土器づくり世帯は、玉章風（イ・ツァンホン）さん(30歳)宅の１世帯だけである（写真１）。1955年、“シプソンパンナ”の解体に伴って、祖父と祖母が”ムンツェンフン”の王宮（勐泐故宮）から、当時、35世帯の曼閣村に移住した（写真２）。

世帯生業　曼閣村では、水田や菜地、養魚池をもち、主として、農業に従事する者がほとんどであった。文化大革命後の開放政策によって、人民公社が解体され、家庭聯産承包制が導入され、合作社中心の集体生産体制から家族（世帯）中心の生産責任体制に移行した。個人の土地の占有権及び使用権が保障される代わり、権利を委譲された個人が土地における生産を担保する請負制度となった。すなわち、再配分された土地の面積や収量に応じて、生産責任を果たし、つまり、納税をすればよいので、土地利用の転換や分割使用も個人の裁量の範囲となった。「曼斗村でも1983年から水田、菜地、養魚池、薪炭林などが各戸に貸与され、個々の責任において生産が行われるようになった。」（田村1994）とあるとおり、当時、玉さん一家も６畝（40ｒ）の水田が分配された。水田では、粳米を主として、年間1tの収穫量があった。また、自留山も配当され、政府が商品作物栽培を奨励していたこともあり、１年間かけて、1,000本のゴム林を植林した。玉さんは、分割相続により、現在、200本を所有している。樹液の採取は、午前３時から午前11時にかけての作業である。水田が割り当てられてから、通年ではあるが、農閑期や休日を利用して、土器づくりをするようになった。しかしながら、昨年、水田の使用権を売却し、漢族男性２名を雇用して、製陶工場を始めた。景洪市の近郊にあるため、曼閣村でも、商売を始める者、賃金労働に従事する者が増えてきた。また、玉さん宅は、傣族の伝統的な高床式、干欄式であるが、レンガ積みの柱と板壁、平瓦葺きの屋根となっている。２階は、玉さん一家が居住し、１階は、土器つくりの工房である。工房は、昇炎式窯を備えており、製陶工場が設立されるまで使用された。現在、父の岩罕滇（アイ・ファンテ）さん（58歳）が主として使用している。

土器づくり職人　玉さん、父の岩さん、そして、祖母（89歳）の３人が土器づくり職人である。祖母は、2003年、現役を退いた。岩さんは、10歳頃、父と母から土器づくりを継承したものの、父の兄弟は土器づくりを伝承していない。また、玉さんの母も土器づくりの経歴がない。玉さんは、16歳頃、兄姉ともに、祖母と岩さんから土器づくりを継承した（写真３）。すでに、玉さんの兄姉は土器づくりを停止している。

勐泐王宮時代（1994年以前）

玉さんの祖父と祖母は、中華人民共和国成立以前、“シプソンパンナ”の盟主的盆地国家“ムンツァオムン”の王宮に居住して、車里宣慰使第40代刀承恩及び第41代刀世勛に奉仕し、伝統的土器づくりに従事していた。ただし、土器づくり職人が所属する身分階層等は定かでない。王宮における土器づくりは、ほとんどが祖父・祖母からの伝聞であるが、幼少の頃、岩さん自身が見聞し、記憶している内容もある。

生産器種　王宮や宮廷、“ツァオムン”及び“ポーラム”の邸宅で使用するための、装飾性に富んだ台付水甕、主として龍を形象した塑像等の貢献用器種を生産した。また、王宮での食事を調理し、提供するための什器、彼らに奉仕する“タイムン”や“クンフンツァオ”が使用する什器も製作し、王宮全体の什器用器種の生産も賄っていた。また“ワット”（寺）及び“トゥ”（僧）に寄進するための供献用器種も生産した。

生産様式　『景洪村寨労役負担票』を見ると、各曼は、定められた貢納及び徭役が課されているが、土器づくりを負担する村寨の記述がない。ちなみに、曼閣村では、划船及び繳酸魚と定められていた。王宮では、厳然とした男女の性差別分業と役割分担があった。女性は、装飾性に富んだ台付水甕、回転台や叩き具で成形する鍋や水甕等の什器用器種を製作し、男性は、塑像を担当した。ただし、土器づくりの中心的役割は、女性であった。また、17世帯が専業し、通年、雨季でも土器づくりを行っていた。

原材料調達　男性は、土器づくりの生地である粘土や

砂を採取し、踏臼で粘土を粉砕するという徭役も担当した。薪等の燃料を貢納する役割が課された村寨もあったが（第１表）、薪や藁を調達し、薪を割ることも男性の役割であった。野焼きは、男女協働で行った。

販売形態　貢献用器種は、王宮や邸宅に納められるが、王宮全体で使用するための什器用器種は、フルタイムの土器づくりのため、余剰も生じた。そのため、週１回、瀾滄江の南岸の王宮から下流の“ムンツァオムン”の中心的市場まで船で出荷し、土器の容量分相当の米と交換した。運搬及び販売も男性の役割であった。

曼閣村時代（1954年～2003年）

生産器種　岩さんは、9～10歳頃、父から塑像、祖母から装飾性に富んだ台付き水甕や傣族の伝統的な鍋・炊飯（湯沸し）鍋・水甕等の什器用器種の土器づくり技術を継承した。この時代の役割分担としては、原則、祖父と岩さんが塑像を製作し、祖母と玉さんが什器用器種と供献用器種を製作した（写真４）。

生産様式　祖母は、15年前、曼斗村の玉さんを土器づくりの助手として、２日間程度雇用したことがある。曼斗村の玉さんによれば、祖母は、什器用器種と供献用器種を製作し、泥窯を使用して野焼きをしていた。その後、昇炎式窯が導入されたことになる（写真５）。しかしながら、曼閣村移住直後と承包制以降では、玉さん一家の世帯生業も大きく変更され、土器づくりに対する関与程度も低下し、性差別分業もほとんど行われなくなったと考えられる。

原材料調達　生地は、1983年から使用する水田の田土を採取し、瀾滄江から揚げられた砂を使用した。薪や藁等の燃料も自給できていた。

販売形態　製陶工場時代になっても、仲買人を介して、卸売りしてないので、直販方式と考えられる。また、装飾性の高い水甕や塑像も復活させたが、購入されることがなかった。鍋や炊飯（湯沸し）鍋の什器用器種は、金属製鍋や電気釜が一般化し、受注生産となった。

製陶工場時代（2003年以降）

生産器種　貢献用器種を復活させ、さらに、漢族的あるいは現代的な生活様式にあわせて、新しい現代的器種を生産するようになった。また、傣泐の伝統的器種及び現代的器種は、勐泐王宮時代と比較すると、器形や文様が多様化している。また、黒色処理が施された黒陶は、伝統的な土器様式であったが、現在、紅陶しか生産されていない。玉さん宅の商品棚では、黒陶様の冷水瓶が並べてあったが、油性の黒色スプレーで彩色したものであった（写真６）。

生産様式　２年前、漢族の土器づくり職人２名を雇用して、南側の丘陵部で製陶工場を始めた（写真７）。土練機、電動ロクロを採用し（写真８・９）、現代的器種とともに、伝統的器種も轆轤水挽き成形に変更された（写真10）。玉さんは、伝統的な叩き成形技法を放棄したものの、叩き目や文様だけは付加していた（写真11）。また、大量生産が可能な登窯が採用されていた（写真12）。伝統的器種の需要こそ振るわないが、植木鉢や漬物壺等の新器種の売れ行きが好調である（写真13）。また、１階の工房では、岩さんが製作した塑像の未成品や失敗品が多数散乱しており、芸術性の高い塑像をはじめとする復活器種を新機軸として、贈答品、インテリアとして、高額な工芸品市場の開拓を目論んでいるようである（写真14）。

原材料調達　水田を失うことで、粘土を購入するようになった。2t（運搬費込み）500元である。

販売形態　受注生産であり、直販方式を採っている。仲買人が仲介したり、市場に持ち込んで販売することはないという。玉さん宅の２階のテラスでは、商品棚が据え付けてあり、伝統的器種及び新器種の見本が並べてある（写真15）。この見本を顧客に見せることで、注文を取っている。しかしながら、製陶工場の生産器種のすべてが取り揃えてあるわけでない。植木鉢や漬物壷等の大量出荷器種は、見本になかった。

使用方法　伝統的器種のうち、鍋、炊飯（湯沸し）鍋の什器用器種は、昨年、受注が入らなかったとおり、近年、ほとんど生産していない。1950年頃、中華鍋、アルミ鍋が普及し、一般的となった。鍋は、傣泐の伝統的な献立、とくに、煮込む調理で使用することもあるが、湯沸し鍋や甑は、粳米が主体となることで、ほとんど使用されなくなった。また、電気釜が本格普及することで、炊飯（湯沸し）鍋もほぼ不要になった。伝統的な年中行事において、糯米が供献されるが、電気釜で蒸されるという。ただし、供献形態は、湯沸し鍋と甑のミニチュアの組み合わせを容器としている。また、傣族の伝統的生活習慣が残置されており、２階のテラスにおいて、水甕が据え置かれる。そのため、水甕の需要は、少ないながらも確保されている。また、水甕（LL）は、普洱茶の卸売り容器として、製茶会社あるいは茶の仲買人が購入している。

３－１－２　曼斗（マンドウ）村

土器づくり世帯　州都景洪の近郊農村である。瀾滄江北岸に位置する。曼斗村の中心部は、景洪 - 勐海間を連絡する景亮路が開削され、西双版納大橋が架橋されることで、大規模な再開発が進行している。また瀾滄江－メコン川流域総合開発に伴って、伝統的な村落景観の変貌を際立っている。100世帯が居住し、土器づくり世帯は、玉勐（イ・ムン）さん（50歳）が唯一である。40年前、玉さんが７～８歳の頃、ほとんどの世帯

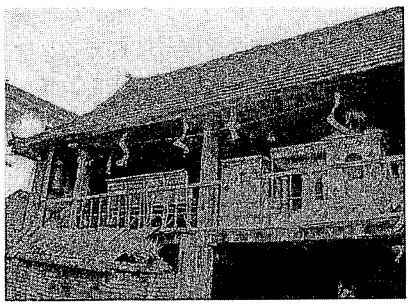


写真１　玉章風さん宅（木造化された竹楼）［曼閣村］

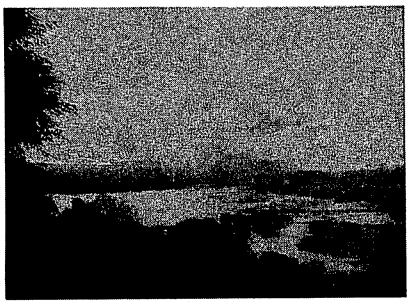


写真２　孟泐故宮から瀾滄江と允景洪の景観［景洪市］

写真３　玉章風さんの伝統的土器づくり［曼閣村］

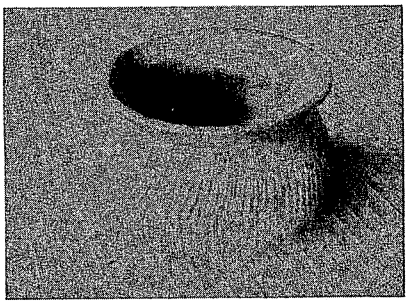


写真４　什器用器種の鍋（S）（叩き成形）［曼閣村］

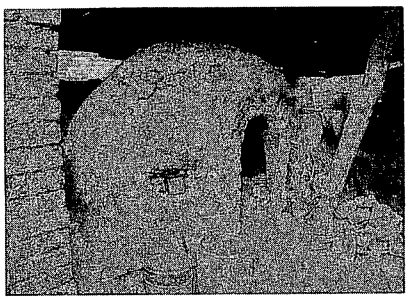


写真５　玉章風さん宅１階の昇炎式窯［曼閣村］

写真６　黒陶様水瓶と油性黒色スプレー［曼閣村］

写真７　玉章風さんの製陶工場（植木鉢）［曼閣村］

写真８　土練機と漢族職人の妻［曼閣村］

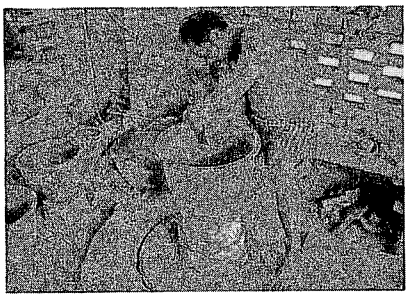


写真９　漢族製陶職人と電動轆轤（植木鉢成形）［曼閣村］

写真10　漢族製陶職人と電動轆轤（水甕成形）［曼閣村］

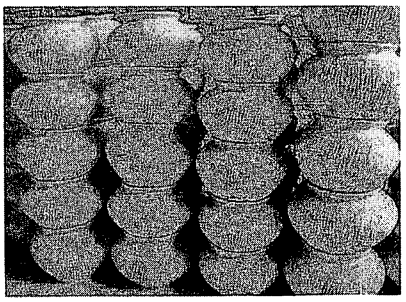


写真11　什器用器種の水甕（轆轤水挽き成形）［曼閣村］

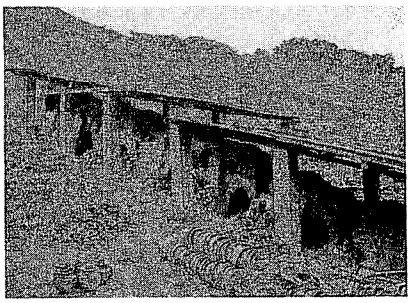


写真12　登窯（窯出しされた状態の植木鉢）［曼閣村］

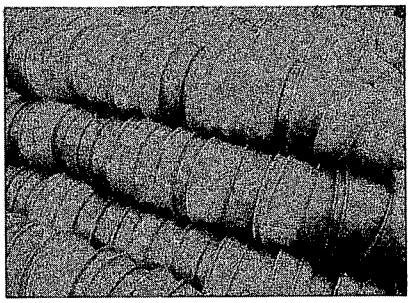


写真13　新機種の植木鉢［曼閣村］

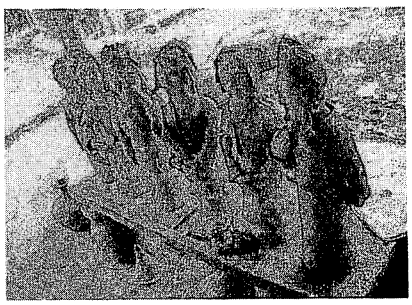


写真14　漢族職人が製作した人物塑像［曼閣村］

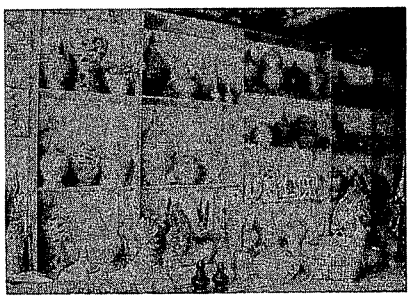


写真15　玉章風さん宅２階の商品棚と見本［曼閣村］

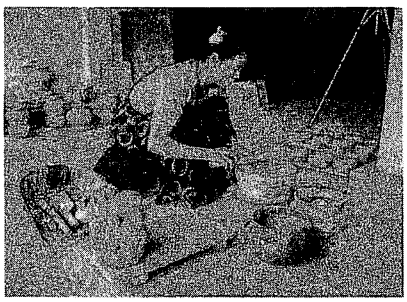


写真16　玉孟さんの伝統的土器づくり［曼斗村］

写真21　水甕の容量区分（S,M,L）［曼斗村］

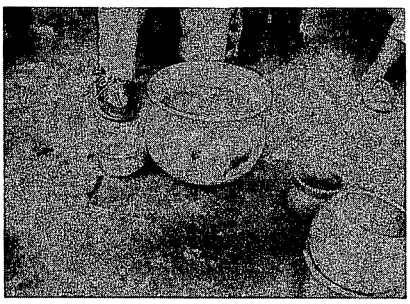


写真26　水甕“モーナム”（SS,L）［曼扎村］

写真17　玉孟さんが製作する什器用器種［曼斗村］

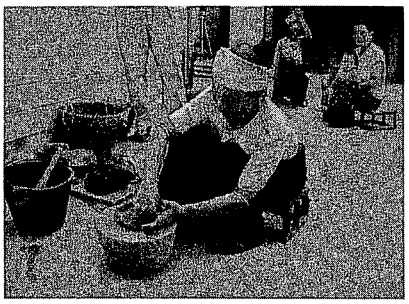


写真22　玉章さんの伝統的土器づくり［曼扎村］

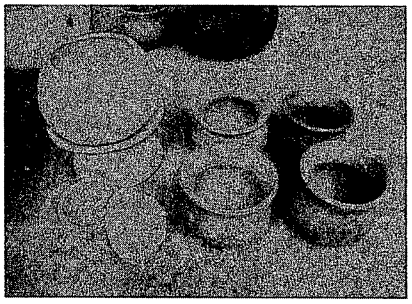


写真27　供献用器種の組み合わせ①［曼扎村］

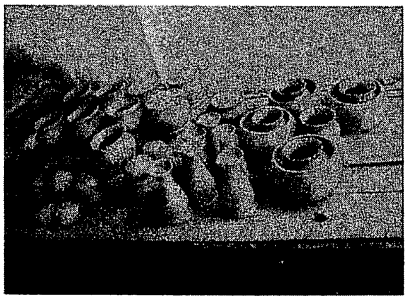


写真18　玉孟さんが製作する供献用器種［曼斗村］

写真23　玉章さんが製作する全器種［曼扎村］

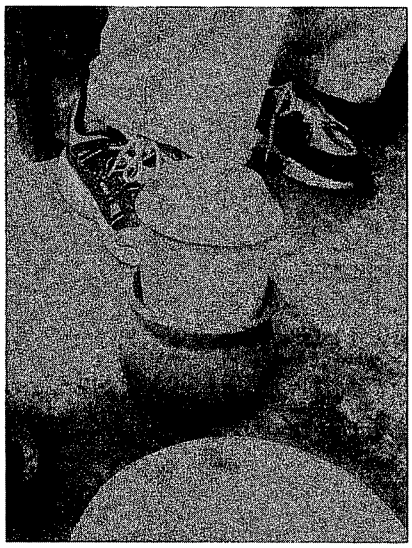


写真28　供献用器種の組み合わせ②［曼扎村］

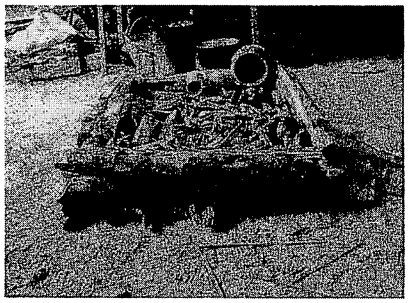


写真19　泥窯の模擬実演（敷燃料の配置）［曼斗村］

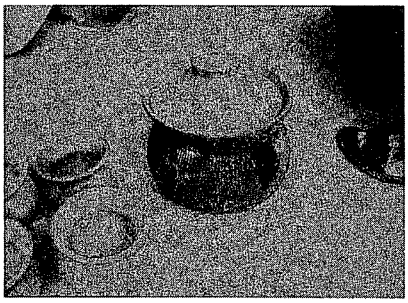


写真24　鍋“モーケン”（L）（受注生産）［曼扎村］

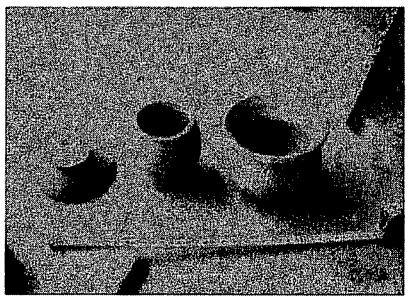


写真20　供献用器種の組み合わせ［曼斗村］

写真25　移動式竈“モーフェイ”（受注生産）［曼扎村］

写真29　茶容“モーサイラ”（伝統的器種）［曼扎村］

が土器づくりを行っていた。30年前、20軒まで減少し、20年前、景洪市全体でも、玉さんと玉さんの母、曼閣村の玉さんの祖母をあわせて、７～８名になってしまった。現在、景洪市から勐腊（ムンラ）県まで見渡しても、伝統的な土器づくり職人は、玉さん以外存在しない。ただし、曼斗村では、引退した土器づくり職人２～３名が居住している。彼らは、50歳代及び60歳代であり、土器づくりを停止して、20年以上が経過している。熟練した職人が高齢化し、引退したという事情ではない。また、20歳代及び30歳代のほとんどは、農業や賃金労働に従事しており、土器づくりの継承者は皆無という。玉さんの娘の玉単罕（イ・タンハン）さんも公務員を志望し、当面、跡目を継ぐつもりはない。

世帯生業　1978年、承包制によって、農地及び山林の分配を受けて、農業に従事していた。しかしながら、10年前、西双版納大橋の建設に伴って、水田の使用権を譲渡し、居宅を新築した。玉さん宅は、干欄式であり、伝統的な竹楼が鉄筋化されたものである。鉄筋コンクリートの柱とレンガ積みの壁、平瓦葺きの屋根となっている。２階は、玉さん一家７人が居住し、１階は、５世帯の漢族の借家人が店子となっている。収入源は、夫の商売と土器の製造・販売に加えて、家賃収入とゴム栽培である。

土器づくり職人　玉さんは、７～８歳の頃、祖父から習い始めて、29歳の頃、土器づくりを継承した（写真16）。父母や兄弟は、継承していない。祖母は、土器づくりの経歴がないものの、販売を手伝っていた。

生産器種　什器用器種である鍋、炊飯（湯沸し）鍋、甑、水甕を生産している（写真17）。また、祭事・祭礼等の年中行事において、庶民は、寺院や僧に対して、仏具用を供献する習慣がある。そのため、庶民が供献用土器として購入する水瓶、杯、台付灯皿、花瓶、台付花瓶、托鉢を生産している（写真18）。また、祖父は、主として、水甕（LL・L）を製作していた。

生産様式　かつての曼斗村の土器づくりは、水田をはじめとする農作業の合間で行っていた。本々、性差による分業も無かったという。玉さんの土器づくりは、家事の傍らであるが、１階の土間を工房として、専業し、通年、雨季でも土器づくりを行っている。また、焼成は、泥窯である（写真19）。雨季の４～９月にかけては、４月の潑水節“サンハンピーマイ”をはじめとする祭事・祭礼が相次ぐため、農繁期にもかかわらず、供献用器種の注文が殺到する。10月以降は、水甕をはじめとする什器用器種の製作が中心になる。そのため、乾季と雨季における土器づくりの頻度は大差ない。

原材料調達　生地は、瀾滄江北岸の水田から採取した田土と流沙河から揚げられた砂を使用している。田土は、かつて玉さん宅が使用していた水田の床土を機械掘削した粘土である。玉さん宅から600m離れた場所に備蓄してあるが、これが枯渇しつつある。これからは、曼郷村及び曼牛村から10ｔ（運搬費込み）12,000元で購入する。また、稲藁は、年間トラクター１台分120元、薪は、年間トラクター２台分560元で購入し、月１～２回の頻度で野焼きしている。

販売形態　原則、受注生産であり、直販方式である。製茶会社や仲買人が水甕（L・M）を茶容として、仕入れに来ることがある。また、歌舞団が水甕（S）を踊りの小道具として、買い付けに来ることもある。

使用方法　玉さん宅でも、鍋が金属製鍋、炊飯（湯沸し）鍋が電気釜に置き換えられている。水甕も水道が敷設されることで、従来のような需要がなくなっており、什器用器種の販売が不振である。しかしながら、鍋、炊飯（湯沸し）鍋、水甕、甑等のミニチュアは、伝統的な年中行事において、供献用器種とともに、供物とされるため、堅調な売れ行きである。

ちなみに、徳宏傣族景頗族自治州における潑水節“サンハンピーマイ”の年中行事を見ると、「潑水節の前日（大晦日）寺の大掃除をおこない、村人全員が揃って山に行き、花を摘んできて寺に飾る。潑水粑粑“ヌオミイバ”や黄金飯を作って仏前に供える。潑水節当日（元日）は寺に集まり、水龍という木製の龍を置いて水を注ぐ。水は回転しながら流れ、周りに置いた仏像を洗う。龍の下に鳳凰の飾りをつけるので、章鳳では、龍鳳“ロンフォン”という。それから和尚さんと家族、通行人にまで祝福のことばをかけながら水をかける。水行事は３日から１週間続き、最後は村人全員が集まり、老人は寺の中で、その他の人は境内の広場で一緒にご馳走を食べるというものであった。」（古島2001）という具体的内容を知ることができる。

玉さんが生産する伝統的器種のうち、“ヌオミイバ”で容器とされる器種は、鍋（SS）、甑（SS）、蓋の組み合わせ（写真20）である。また、花を飾るための容器が台付花瓶の莫迈酒迈“モーマイサンマイ”、甑（S）である。また、甑（S）は、花挿として寺院に供献されるようにもなった。また、玉さんは、その残り水で仏像を洗仏するという。そして、水甕（L）が潑水、つまり、水掛けに使用される。そのため、玉さんは、潑水節で水甕（L）を購入すると、“モーマイサンマイ”を無料サービスしている。潑水節で不可欠な組み合わせなのであろう。また、関門節や開門節等の農耕儀礼に関する年中行事においても、ほぼ同じような器種構成で供献されるという（写真21）。

３－２　勐海県

３－２－１　曼扎（マンツァオ）村

土器づくり世帯　勐海県勐混鎮の農村である。勐海鎮

から車で30分の距離にあり、３輪作の２期目の収穫をしていた。21世帯が居住し、土器づくり世帯は、玉章（イ・ツァン）さん（61歳）が唯一である。30年前、勐混鎮の各村寨では、それぞれ土器づくり世帯があり、１～２名の土器づくり職人が居住していた。当時、曼扎村では、６名の職人が土器づくりをしていた。４年前、玉さんが唯一の土器づくり職人となった。ただし、曼扎村では、引退した土器づくり職人が数名存命している。ほとんどが農業に従事しているが、勐混鎮で商売をはじめたり、賃金労働に従事するものも増えてきた。土器づくりの継承者は皆無という。玉さんの娘や孫娘玉丙（イ・ピン）さんも継承するつもりはない。

世帯生業　水田８畝（53ｒ）を使用し、養魚場も営んでいる。玉さん宅も干欄式である。２階は、玉さん一家５人が居住し、１階は、小規模ながら、養豚及び養鶏を営んでおり、土器づくりの工房ともなっていた。１階の土間は、コンクリートが打設してあり、回転台の軸を差し込む穴が据え付けられていた。収入源は、農業収入と土器の製造・販売である。

土器づくり職人　玉さんは、30年前、土器づくりを始めた（写真22）。同村の玉喃坎（イ・ナンカン）さんから継承した。玉喃坎さんは、男性の土器づくり職人であり、25年前まで現役であった。玉さんの父母や兄弟は、土器づくりの経歴がない。

生産器種　什器用器種の鍋“モーケン”、炊飯鍋”モーカオ”、甑、水甕“モーナム”、移動式竈“モーフェイ”、供献用器種の托鉢と器台を生産している（写真23）。また、米や水の容器である甕“モーサイラ”を生産している。曼斗村の玉さんと同じように、昆明市の漢族の仲買人が普洱茶の卸し容器に転用し、５年前から茶容として製造・販売するようになった。

生産様式　かつての曼扎村の土器づくりは、水田をはじめとする農作業の合間で行っていた。ただし、雨季は、土器づくりを停止した職人が多かったという。玉さんは、曼扎村で唯一の土器づくり職人であるため、10年前まで専業し、通年、雨季でも土器づくりを行っていた。“モーナム”の成形体の製作であれば、１日あたり10個を製作することができた。その後、伝統的器種の需要が低迷し、通年の生産を断念し、受注生産に踏み切った。今年に入ってから、２月、５月、７月において、それぞれ１回の注文があった。２～３ヶ月に１回の頻度で土器づくりをしたことになる。玉さんは、通年、土器づくりを行いたいところだが、注文が無いため、次回の土器づくりの予定も立っていない。

原材料調達　生地は、使用権を有する水田から採掘した田土と流沙河の砂を使用し、燃料も、村寨内で採集し、ほぼ無償で調達している。

販売形態　勐混鎮の市場に売りに出かけるという直販方式である。“モーサイラ”のように、茶の仲買人が直接買い付けに来ることもある。

使用方法　50年前、金属製鍋が普及し、近年、電気釜も一般化して、“モーケン”、“モーカオ”の什器用器種は、ほとんど使用されていない。ただし、農地や山林における出作り小屋では、電気が敷設されていないため、少ないながらも“モーケン”、“モーカオ”の需要がある（写真24）。また、“モーフェイ”は、出作り小屋だけでなく、曼扎村のほぼ全世帯で使用されている。七輪やカセットコンロのような用途である（写真25）。また、“モーカオ”は、本来の使用方法ではないものの、煮込む調理で使用されるようになったという。“モーナム”も水甕として使用されるものの、さまざまな容器として転用されている（写真26）。玉さん宅では、籾殻を入れて、鶏が産卵するための巣箱にしていた。また、曼斗村と同じように、伝統的な年中行事において、第３表のとおり、什器用器種のミニチュア及び供献用器種が供物とされている（写真27）。

第３表　曼扎村の年中行事における供物

容器の組み合わせ	内容物	数量
托鉢（S）と器台（S）	水	1
甑（SS）と蓋と“モーケン”（SS）	糯米	1
“モーナム”（SS）	水	2
“モーナム”（SS）	粳米	2

しかしながら、容器と内容物を見ると、“モーケン”と甑が組成し、粳米が“モーナム”に入れられており、什器用器種の伝統的な用途と内容物が合致していない（写真28）。これは、傣泐の伝統的な生活様式が払拭されつつある中で、伝統的器種の存在感が薄れていることに原因がある。什器用器種が単なる容器となって、器種の概念が形骸化している証拠ともいえる。また、“モーサイラ”が茶容として転用されていることが特徴的である（写真29）。また、昆明市内の小売店では、普洱茶の卸し容器とされた“モーサイラ”が、そのまま店頭に並べられているという。

３－２－２　曼朗（マンラ）村

土器づくり世帯　勐海県勐遮鎮の農村である。曼朗村は、勐海鎮から車で１時間30分、勐遮鎮から車で１時間の距離にある。103世帯が居住し、玉児蘭（イ・アラン）さん（67歳）を含めて、９名の土器づくり職人が居住している（写真30）。彼らは、50歳代及び60歳代である。玉さんが12歳頃、全70世帯に対して、12名の職人がいた。20歳代及び30歳代は、農業や勐遮鎮で賃金労働に従事しており、土器づくりの後継者はいない。

世帯生業　農業及び茶栽培、養魚が主な生業である。

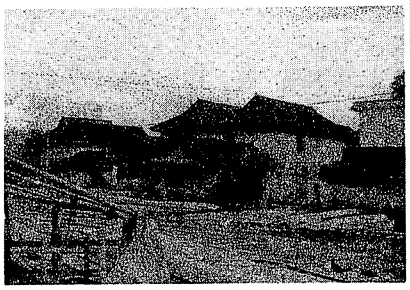


写真30　玉児蘭さん宅（木造レンガ積の干棚式）［曼朗村］

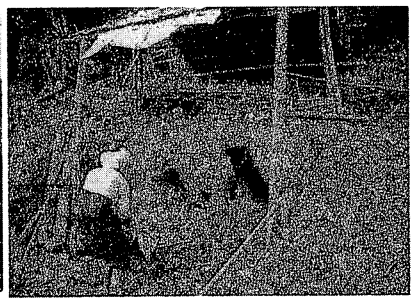


写真35　昇炎式窯（土器づくり職人の共同使用）［曼朗村］

写真40　土器づくり職人（曼朗村）の露店②［孟遮鎮］

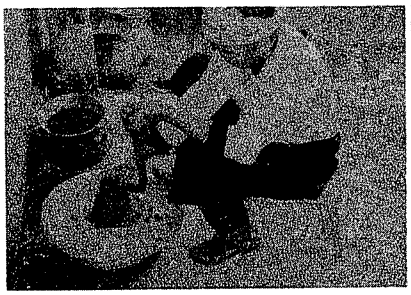


写真31　玉児蘭さんの伝統的土器づくり［曼朗村］

写真36　玉児蘭さんの粘土採掘（田土を掘削）［曼朗村］

写真41　玉児蘭さん宅１階の在庫［曼朗村］

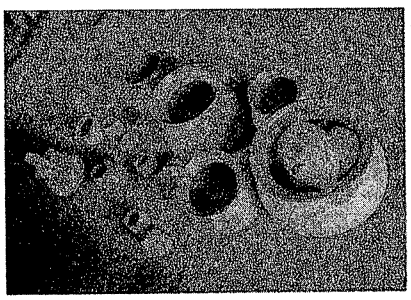


写真32　玉児蘭さんが製作する全器種（鉛釉）［曼朗村］

写真37　玉児蘭さんの露店［孟遮鎮］

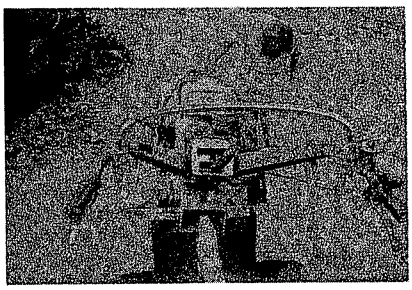


写真42　土器を運搬する孫息子と耕運機［曼朗村］

写真33　鉛釉素材（購入した延棒）［曼朗村］

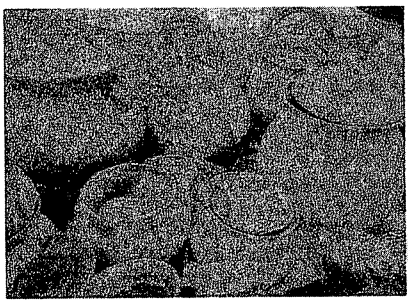


写真38　玉児蘭さんの販売器種［孟遮鎮］

写真43　供献用土器の組み合わせ［曼朗村］

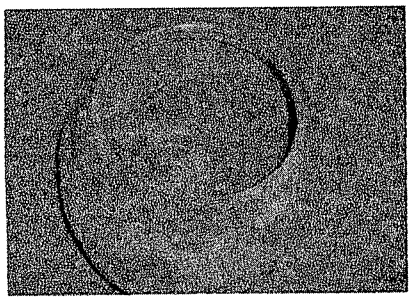


写真34　内外面に鉛釉が施された托鉢（L）［曼朗村］

写真39　土器づくり職人（曼朗村）の露店①［孟遮鎮］

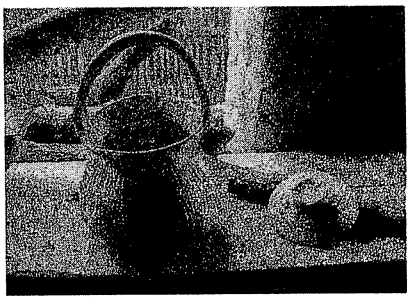


写真44　薬缶“モータンヤ”（漢方薬の煎じ用）［曼朗村］

玉さん宅も干欄式であり、２階は、玉さん一家５名が居住し、１階は、小規模ながら養豚を営んでおり、土器づくりの工房や在庫置き場となっていた。１階の土間には、土器づくりの回転台の軸が据え付けられていた。玉さん一家の収入源は、夫の医業と次男夫婦の農業及び茶栽培、養魚、そして、玉さんの土器の製造・販売である。

土器づくり職人　玉さんは、12歳頃、母から土器づくり伝承した（写真31）。当時、すでに、昇炎式窯が採用されており、鉛釉が掛けられていた。父や兄弟は、土器づくりの経歴はない。

生産器種　什器用器種の鍋“モーケン”、炊飯鍋“モーツァオカオ”、甑、水甕“モーナム”、そして、蓋、供献用器種の台付灯皿、托鉢“カオ・クワン”と蓋を生産している（写真32）。器種構成の多様性はない。また、伝統的器種の範疇でない土瓶“モータンヤー”が生産されている。漢族が漢方薬を煎じて飲用する習慣が持ち込まれ、製作されるようになった。これらの器種は、いずれも鉛釉が施される（写真33）。口縁部内面の釉掛けが丁寧であるものの、胴部から底部にかけては粗雑である。ただし、托鉢は、内外面が釉掛けされる（写真34）。

生産様式　2006年８月の生産量を見ると、鍋、炊飯鍋、水甕、土瓶各20個、供献用器種50個を生産している。大量生産ではないが、昇炎式窯が採用されている（写真35）。玉さんの土器づくりは、家事の傍らで、農作業も手伝いながら、専業し、通年、土器づくりを行っている。曼朗村の約半数の土器づくり職人は、雨季のため、また、農繁期のため、土器づくりを停止している。2006年８月の野焼きでは、手空きであった同居している次男夫婦が手伝った。

原材料調達　生地は、使用権をもつ水田の田土と流沙河から採取した砂を使用している（写真36）。ただし、燃料のうち、薪は、年間１t60元で購入している。

販売形態　玉さんは、勐遮鎮の市場において、土器販売の露店を開いているところで、偶然、出会うことができた（写真37・38）。ちなみに、これは、西双版納傣族自治州最大の市場である。市場では、同じ村から２軒の土器づくり世帯の露店が出されていた（写真39）。別の露店では、男性が土器を販売していた（写真40）。販売器種は、いずれの露店も同じであり、玉さんは、全器種各４個を販売していた。都合、月１回の焼成を行って、これを５週に分けて、市場で販売している。４週しか市場が立たなかった場合は、玉さん宅の１階で残余の土器を在庫としている（写真41）。勐遮鎮は、曼朗村から10km離れており、市場は、毎週日曜日に開かれている。玉さんは、市場での売れ行きを見ながら調整生産している。曼朗村から未舗装の道路をトラクターで土器を運搬し（写真42）、午前８時から午後３時まで露店を開いている。当日は、前日焼成した土器を店頭に並べていた。仲買人を介して、卸売りはしない。曼朗村の土器づくり職人の一般的な販売形態である。

使用方法　“モーケン”、“モーツァオカオ”の什器用器種は、ほとんど使用されていない。やはり、金属製鍋や電気釜が普及したことによる。ただし、曼扎村と同じように、通電していない農作業小屋等では、現役使用されている。また、きわめて稀であるが、傣泐の伝統的な食事を調理するために購入されることがある。ただし、本来の使用方法が分からないため、“モーツァオカオ”で副食を調理することもある。近年では、漢族の住人や観光客がインテリアとして、伝統的器種を購入することも少なくない。一方、“モーナム”は、曼朗村のほぼ全世帯で、水甕として使用されている。やはり、傣族の伝統的な生活習慣が払拭しきれずに、干欄式の２階のテラスにおいて、水甕が居並ぶ光景が目に付く。また、伝統的な年中行事において、水を入れた“モーツァオカオ”（SS）と甑（SS）と蓋の組み合わせ供物とされている（写真43）。内外面鉛釉が施された托鉢は、供献用器種であり、曼斗村の水甕（L）と同じように、潑水節で水撒きに使用される。さらに、漢方薬を飲用する漢族の習慣が浸透して、曼朗村ないしは勐遮鎮のほぼ全世帯が“モータンヤ”を所有している。最早、必需品となっており、売れ筋商品となっている（写真44）。

４　伝統的土器づくりの変容

４－１　食事様式と生産器種の変化

“シプソンパンナ”時代の土器づくりは、曼閣村の岩さんのインタビューで、勐泐王宮における土器生産の様子を窺い知ることができた。しかしながら、当時の傣泐の村寨、つまり、各曼における土器づくりは、岩さんの知るところでなかった。

勐泐王宮では、少なくとも、貢献用器種、供献用器種、什器用器種を生産していた。貢献用器種は、“ツァオペンディン”が居住する王宮や“ツァオムン”・“ポーラム”の邸宅で使用される装飾性の豊かな台付水甕、龍を形象した塑像である。供献用器種は、“ワット”や“トゥ”が宗教的慣行で使用する托鉢、台付灯皿等である。什器用器種は、傣泐の生活様式や食事様式で使用する鍋、炊飯（湯沸し）鍋、水甕である。

1950年、中国人民解放軍が“シプソンパンナ”の領域に進駐し、1954年、中国共産党の支配下となることで、これまでの伝統的政体が解体された。傣泐の土地所有関係は、地主制に移行していたが、和平協商土地改革を通じ、社会主義化が進められた（長谷川2001）。1955年、“シプソンパンナ”が西双版納傣族自治州となり、1956年、傣泐の支配者層は、貢納・徭役を収奪する特権が剥奪された。岩さんをはじめとする土器づくり職

第２表　各村寨で生産が確認された器種と卸売価格・小売価格・年間生産量

器　種	容量区分	蓋の有無	釉の有無	文様有無	曼閣村の生産器種				曼斗村の生産器種			曼乍村の生産器種			曼朗村		
						卸売価格	小売価格	年間生産量		小売価格	年間生産量		小売価格	年間生産量		小売価格	年間生産量
伝統的器種：什器用器種																	
鍋	L	●			●												
	M	●			●		15					●	8	20			
	S	●	○		●	8	10	20～30							●	5	200
	SS	●			●				●			●	0.5	10			
炊飯鍋	L	●			●												
	M	●			●		10	0									
	S	●	○		●										●	4	200
	SS	●	○		●				●	5	500				●	1	500
甑	S				●		30	0	●	10	80						
	SS	●			●							●	1.5	10	●	1	500
水甕	LL	●			●		80～150	100									
	L	●	○		●	40	50	数千個	●	40	400	●	8	30	●	7	200
	M	●	○		●	25	30	数千個	●	30	500～600				●	6	200
	S	●			●	15	20	数千個	●	15	500～600						
	SS	●			●				●			●	1	100			
甕	LL											●	10	12			
移動式竈	LL											●					
伝統的器種：供献用器種																	
水瓶	L			●	●												
	M			●	●	8	10	5,000-6,000	●	75	15						
	S			●	●				●	10	300						
杯									●	2	1,000						
灯皿	S				●												
	SS				●												
台付灯皿	S		○		●	4	5		●	10	50				●	2	500
	SS				●				●	1	70～80						
花瓶	S			●	●	8	10		●								
台付花瓶	S			●	●				●								
托鉢	L				●	70	80	4,000	●								
	M				●	8	10	4,000	●	20	20～30						
	S		○		●										●	10	50
	SS				●				●	5	200	●	2	10			
器台	S				●							●	2	10			
陶瓦			●	●	●												
伝統的器種（復興器種）：貢献用器種																	
水甕	LL	●		●	●												
	L	●		●	●												
	M	●		●	●												
	S	●		●	●												
台付水甕	LL	●		●	●												
	L	●		●	●	150	180	0									
	M	●		●	●	100	120	0									
	S	●		●	●	80	100	0									
香炉	LL	●		●	●												
	L	●		●	●												
	M	●		●	●												
	S	●		●	●												
台付香炉	LL	●		●	●												
	L	●		●	●												
	M	●		●	●												
	S	●		●	●												
陶像	LL		●	●	●												
	L		●	●	●												
	M		●	●	●		300	2,000									
	S		●	●	●												
現代的器種（新器種）																	
広口壺	L				●												
	M				●												
	S				●												
狭口壺	L				●												
	M				●												
	S				●												
貯物壺	L		●	●	●												
	M		●	●	●												
土瓶	M	●	○		●										●	5	500
	S	●	○		●										●	2	500
植木鉢	L				●												
	M				●												
	S				●												
茶容	S	●		●	●	90	100										

*「●」は「有」を表示　**「●」は各村寨で生産が確認された器種　***「○」は曼朗村の鉛釉の有無　****蓋付き器種は身と蓋をあわせた価格

人は、勐泐王宮を追われた。

また、雲南邊疆では、国内移民政策によって、漢族が大量移入し、傣泐の伝統的な生活様式に多大な影響が及ぼされた。まず、漢族の副食文化が浸透することで、（写真45）、中華鍋が急速に普及した。そして、副食調理における優位性もあって、金属鍋が土鍋を席巻した（写真46）。次に、傣泐の食事様式は、糯米を祝食とていた。伝統的な蒸す調理は、湯沸し鍋と木製の刳り貫き式甑の組み合わせであったが、中華鍋と刳り抜き式甑、そして、中華鍋とアルミ甑の組合わせに変更され（写真47）、湯沸し鍋の需要が縮減し、最小化した。また、粳米がほぼ常食されるようになった背景として、品種改良がある。西双版納傣族自治州では、２期作ないしは３期作の輪作が可能となり、政府から糯米から粳米の作付け転換が奨励されたことがあげられる（写真48）。傣泐は、糯米・粳米を栽培し、粳米は、糯米と同じような粘りのある炊き上がりとなるように、炊き干し法で炊飯していた（印南1994）。しかしながら、粳米が主食となることで、電気釜が本格普及することになり、炊飯鍋の需要が激減した。景洪市及び勐海県では、1995年頃、炊飯器や蒸す機能が付いた炊飯器が普及した。通電している村寨では、ほぼ全世帯が電気釜を所有している。勐遮鎮の店舗では（写真49）、蒸し機能付きの炊飯器が100～120元の価格帯で販売されていた（写真50）。また、糯米と粳米の両方が電気釜で調理ができるようになり、曼扎村の玉さん宅のように、朝食及び昼食が粳米、夕食が糯米と食べ分けるようにもなった。強飯は、腹持ちがよいため、朝まで空腹感に悩まされることがない。また、傣泐の高齢者層は、伝統的な食事様式、つまり、糯米が中心の献立を好むようだが（写真51）、若年者層から壮年者層にかけては、副食が中心の献立、すなわち、副食にあう粳米をほぼ常食している。傣泐の伝統的な食事様式の変容にあわせて、伝統的な鍋や炊飯（湯沸し）鍋の需要も最小化を通り過ぎて、不要化が進んでしまっている。現在、４つの村寨では、最早、鍋及び炊飯（湯沸し）鍋が受注生産となっている。

しかしながら、電気が敷設されていない農地や山林では、未だ、伝統的な什器用器種が常用されている。居宅から離れた場所にあるトウモロコシ畑や茶畑の出作り小屋、刀耕火種、つまり、焼畑を営む少数民族の焼畑小屋において、食事を調理するための鍋や炊飯（湯沸し）鍋が常備されている。刀耕火種は、陸稲や雑穀の栽培が主体であるため、炊飯（湯沸し）鍋が不可欠である。ただし、承包制によって、焼畑地の移動も自留山内に限られることで、山地少数民族の伝統的な焼畑農法も衰退しつつある。その代わり、西双版納傣族自治州は、ゴム栽培の生産基地とされ、1956年、最初の国営農場が建設され、漢族移民、とくに、貧農層を大量投入し、原生林の伐採や開墾を推し進めた（長谷川2001）。旧来の焼畑地がトウモロコシ畑（写真52）ないしは茶畑（写真53）、さらには、ゴム林の切り替え地とされた（写真54）。今のところ、出作り小屋等における鍋や炊飯（湯沸し）鍋、曼扎村の移動式竈“モーフェイ”等の最低限の需要は残されている。

４－２　伝統的な生活様式と観光開発

曼閣村、曼斗村、曼扎村、曼朗村における土器づくり世帯は、いずれも傣泐の竹楼が材料変更された干欄式という住居形態であった。龍竹の使用が厳しく制限されることで、伝統的な竹骨工法が採られなくなり、ほとんどが木やレンガ積みの柱となっている（李1994）。曼斗村の玉さん宅のように、この10年くらいで、鉄骨化、鉄筋化された住宅も少なくない。また、1980年代後半の民工潮によって、傣泐の干欄式建物の一階部分は、漢族移民が賃借するようになった。曼斗村の玉さん宅のような床下アパートが形成され、西双版納傣族自治州では、傣族一戸あたり平均８世帯の店子を擁するようになっている（菅野2001）。傣泐の住居形態も大きな変貌を遂げているが、少なくとも、伝統的な空間構成とその利用方法が堅持されている。2階の間取りは、テラスが必置され、炊事洗濯などの水周りの家事を行う空間となっている。ほとんどの世帯が水道を敷設しているが、未だ、水を汲み置きするための水甕を据えている（写真55）。買い替え需要は大きくないが、水甕の最低限の需要が残されている。

西双版納傣族自治州では、1985年、景洪県及び勐臘県が開放地区となった。外国人観光客の出入りが簡便となり、エスニックな資源を商品化することで、観光開発が進展している。そして、“シプソンパンナ”の歴史的風致、少数民族固有の生活様式を参観させるエスニック観光というツーリズム形態が確立された。

こうした中で、1987年、景洪市内において、公園型観光施設の西双版納民族風情園が建設された（写真56）。また、少数民族の村寨を再構成した西双版納傣族園等が開業し、入園料100元、ガイド料25元という高額にもかかわらず、午後３時の潑水節のアトラクションにあわせて、１日あたり700名もの入園者数がある。民族衣装に身を包んだガイド70名が旅行団を接遇している。

マス・ツーリズムに対応した観光施設では、飲食、民族歌舞、宿泊をパッケージとして、潑水節をはじめとする伝統行事や機織を見世物化し、甘蔗圧搾機や米搗き用踏み臼を体験型のアトラクションとすることで（写真57）、民族文化の疑似体験を売り物にしている。民間資本のエスニック・レストランやテーマパークにおいても、同じようなコンテンツで観光客を誘致して

いる。このうち、エスニック・レストランでは、饗宴の際、民族歌舞で接待するが、打工（出稼ぎ）の少数民族の少女を踊り手とし、組織化された歌舞団を擁するものも少なくない（写真58）。曼斗村の玉さんは、こうした歌舞団を大口顧客の一つとして挙げていた。傣泐の歌舞を演出する小道具として、水甕（S）が不可欠なのであろう。また、曼閣村の玉さんも「秘境雲南民間美術」と名乗り、「傣陶世家」を屋号とし、秘境という土地柄と傣泐の土器づくりの伝統性と正統性を主張している。西双版納傣族自治州では、エスニックな文化資源を資本とする観光化が進んでおり、潑水節が観光産業における主力商品である限り、水甕の需要も命脈を保ち続けることになろう。ちなみに、西双版納傣族園では、潑水節で使用する水甕は、本来、銀製であったが、現在、プラスティック製を使用している。また、西双版納傣族園が所在する景洪市近郊の勐罕鎮では、土器づくり職人が存在しないため、伝統的な土器が必要な場合、景洪市、すなわち、曼斗村まで出かけて、購入しているという。

4－3　傣泐の信仰と供献用器種

傣泐は、西南タイ諸語民族と同じように、祖先や守護霊、精霊等の日常的な祭祀を執り行ってきた。また、水擺衣と称されるとおり、水田稲作を生業とし、雨季の始まりから終わりにかけて、さまざまな農耕儀礼を折々で行ってきた。さらに、14世紀以降、“シプソンパンナ”では、上座部仏教（小乗仏教）を受容し、各曼で寺院が置かれた。寺院及び僧が必要とする仏具や供物、喜捨に応えるための容器等が供献されるようになった（写真59・60）。

そのため、1年を通じて、それぞれの祭事・祭礼に対応した供献用器種が製作され、伝統的土器づくりがこれを賄ってきた。未だ、傣泐の村塞では、供献用器種の比較的安定した受容があるという。景洪市、勐腊県では、曼斗村の玉さんが、唯一の供給源となっているが、製陶工場が肩代わりを始めている。曼閣村の玉さんの製陶工場では、水甕や供献用器種を数千個単位で生産し、販売している。今後の伝統的土器づくりの行方を見定めるためにも、こうした製陶工場の動向にも目配せする必要がある。

また、鍋や炊飯（湯沸し）鍋という什器用土器の減産が余儀なくされ、供献用器種の生産に軸足を置き換えることで、伝統的土器づくりを継続してきた。しかしながら、供献用土器の需要がこのまま維持されるとは限らない。傣泐は、上座部仏教に対する厚い信仰があるものの、文化大革命では、寺院が破却され、精霊祭祀も迷信と断ぜられた経緯がある。こうした行き過ぎた宗教政策は是正され、宗教的施設も復興されたものの、現在、景洪市近郊の村寨では、経済的価値観の浸透に伴って、学齢期児童の見習い出家が激減し、傣泐の仏教的価値観や宗教的慣行を継承していくことが困難となっている（長谷川2005）。明らかに、傣泐の伝統文化や信仰が衰退しており、寺院や僧に対する供献意識も薄らいでいる。こうした中で、伝統的な供献用土器の需要も時間をかけて減退していく懸念もある。

4－4　伝統的器種の転用と現代的器種の登場

什器用器種をはじめとして、傣泐の伝統的器種が材料変更されることで、伝統的土器づくりが危機に瀕している。こうした事情は、供献用器種の需要が維持されようとも、根本的な改善には繋がらない。しかしながら、伝統的土器づくりも生き残りを賭けて、いくつかの注目するべき新しい取り組みを行っている。

まず、観光物産としての伝統的土器づくりの活用である。とくに、外国人観光客にとって、黒陶をはじめとする伝統的器種は、傣族を象徴する西双版納傣族自治州の代表的な観光物産となっている。また、西双版納傣族自治州の年間観光客数を見ると、近年、50,000人の外国人観光客と2,000,000人の国内観光客がある（長谷川2001）。国内観光客の圧倒的多数を占める漢族にとっても、伝統的器種は、民族衣装と比肩する民族工芸品となっている（写真61）。勐泐大道で普洱茶の小売店を経営する余さんの店舗では、勐遮鎮の市場の露店で購入した曼朗村の鍋が飾ってあった（写真62）。漢族観光客は、インテリアの置物や容物として、傣泐の伝統的器種を買い求めている。装飾性の豊かな冷水瓶と杯の組み合わせが人気商品である。また、観光物産として、贈答品・インテリアとして、“シプソンパンナ”時代の貢献用器種を復活させている。曼閣村の玉さんの製陶工場では、王宮、宮廷、邸宅等で使用されていた水甕や塑像を生産し、そして、これまでにない図像を形象化することで、装飾性や堅牢性といった付加価値も高めている。これまでのところ、水甕100～180元、塑像200～300元という高い価格設定もあり、売れ行きは芳しくない。ただし、今後の飛躍的な経済発展が見込める西双版納傣族自治州では、こうした復興器種が将来の売れ筋商品となる可能性もあるだろう。

次に、伝統的器種の転用・流用である。これは、普洱茶の工場や仲買人の発案というが、伝統的器種を容器とすることで、普洱茶の付加価値を高める取り組みである。勐海県は、普洱茶の産地であり、茶葉の加工工場が点在し、景洪市では、観光客相手の小売店が軒を連ねている。出荷数は少ないながらも、曼閣村の水甕（LL）や曼扎村の“モーサイラ”は、卸売容器として再生する取り組みもある。

そして、伝統的土器づくりから現代的土器づくりの

移行である。現代化された生活様式で必要とされる新器種を開発し、新たな土器の需要を掘り起こすことである。曼閣村の製陶工場では、復興させた貢献用器種の構成に香炉及び台付香炉を加えることで、商品構成を充実させている（写真63）。また、エスニックな観光物産として、普洱茶を演出するため、小売用茶容を生産している（写真64）。さらに、「竹の子の漬物や小魚の塩辛に使われる漢族の壺は、傣族の素焼き土器とは異なる。釉薬がかかり、口のふちに水を溜めて密閉できる専用の壺である。現在の西双版納の壺類でどの民族にも普遍的なのは、この壺かもしれない。」（印南1994）とあるとおり、漬物壺が大量生産されている（写真65）。各村寨や景洪市及び勐遮鎮の市場でも、この漬物壺を見出すことができる（写真66）。昆明市の侯さん宅を訪問した際も自家製の漬物が漬け込んであった。また、曼閣村の製陶工場では、瓦生産も行っていた。瓦職人と同じ型板成形であり（写真67）、傣泐の住宅（写真68）や寺院（写真69・70）の瓦の需要も射程に入れていることは明らかである。

このように、土器の材質的な優位性を活かしながら、市場における成長可能性が見込める植木鉢や漬込壺、そして、瓦の販路拡大、そして、販売促進を図ろうとしている。こうした状況は、伝統的器種が減産を余儀なくされる中、伝統的土器づくりから脱却し、大量生産、大量消費を前提とする現代的土器づくりへの適応が目論まれた結果である。

４－５　伝統的土器づくり技術の現代化

勐泐王宮における土器づくりでは、男性が塑像、女性が塑像以外のすべての器種を製作するという絶対的な性差別分業があった。しかしながら、“シプソンパンナ”の解体後、曼閣村の岩さんのように、貢献用器種が不要化されることで、分業を越えることが禁忌的事項に当たらなくなった。また、傣泐の村寨では、曼斗村の玉さんの祖父、曼扎村の玉喃坎さんのように、男性であっても、供献用器種や什器用器種を製作していたのかも知れない。

また、伝統的土器づくりは、漢族をはじめとする西双版納傣族自治州の新しい住人、漢族化された少数民族出身者に向けて、現代化された生活様式に適合した現代的器種を供給することで、現代的土器づくりとして、息を吹き返しつつある。しかしながら、伝統的土器づくり職人の行方は、分岐点に立たされている。１つは、現代的土器づくりに適応できない職人が淘汰されることである。もう１つは、現代的土器づくりに最適化することで、傣泐の伝統的土器づくり技術を放棄・忘却してしまうことである。

曼扎村の玉さんは、これまでの生産様式をほぼ踏襲している。しかしながら、勐海県の農村部でさえも、伝統的器種の需要が激減し、８月以降の製作機会の目処が立たない状況にある。需要の最小化にあわせて、土器づくり職人が自然消滅する恐れが出てきている。

一方、曼斗村では、景洪市の近郊農村であるため、異職種従事が加速することで、土器づくりの廃業が相次いでいる。結果として、玉さんは、景洪市及び勐腊県の唯一の職人となってしまったが、顧客をほぼ独占することにもなった。また、玉さんは、大口顧客の要望に応えて、伝統的器種を転用し、傣泐の仏教的価値観や宗教的慣行を尊重しながら、玉さん自身が供献用器種に依存することで、生業としての土器づくりを維持してきた。しかしながら、頑なに伝統的器種を生産しながらも、徐々に土器づくり技術が変容している。水甕や供献用器種が生産主体となることで、粘土に対する砂の混和を行わなくなった。調理等で火にかけられる鍋や炊飯（湯沸し）鍋という什器用器種を生産しなくなったからである。これも低コスト化、省力化にむかう自然な変容といえる。また、時間をかけて焼き締められるようになり、一緒に焼成される供献用器種も同様の焼き上がりとなっている。

曼閣村の岩さんと玉さんは、社会主義化、そして、現代化を乗り越えて、土器づくりの家業を守り抜いた。昇炎式窯を導入し、家内制（工房）から工場制という業態の劇的な転換を実現している。現代的土器づくりに対する先見性を備えていたようである。そのため、曼閣村の土器づくり技術は、最早、伝統的ではない。製陶工場では、電動轆轤を採用し、回転台を使用した粘土紐巻き上げ技法から轆轤水挽き技法に変更されている。また、熟練した陶工を確保することで、同一規格の成形体を大量生産することが可能となった。そして、昇炎式窯、登窯を導入することで、焼成単位の大口化を実現し、野焼きから窯焼きの転換を果たした。

このように、現代的土器づくりの移行に伴って、さまざまな伝統的土器づくり技術が放棄された。ただし、水甕や供献用器種の供給においては、払拭し切れない伝統性も残置されている。とくに、水甕は、傣泐の伝統的な器形や文様を挽き摺っており、曼閣村の製陶工場では、漢族陶工が轆轤水挽き成形した成形体に対して、玉さんが伝統的な文様と叩き目を付けている。叩きは、文様を付加するだけであり、叩き板も小さくなって、本来の二次成形技術ではなくなっている。

こうした現代的土器づくりに対して、曼斗村の玉さんは、やや距離を置いている。玉さんは、1996年、「ジャパンエキスポ佐賀‘96世界・炎の博覧会」において、傣泐の伝統的土器づくりを実演するため、来日したことがある。その報酬や見返りではないが、日本から土練機をはじめとする各種機械が送られたことがある。

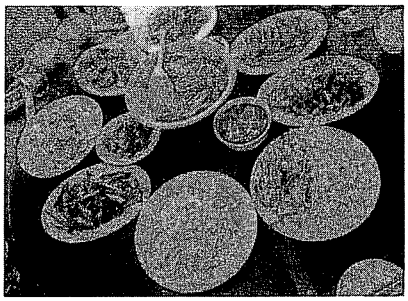


写真45　副食を中心とする食事様式［孟海鎮］

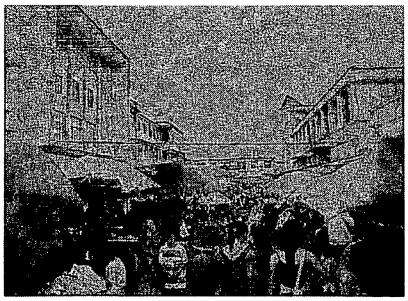


写真49　西双版納泰族自治州最大の市場［孟遮鎮］

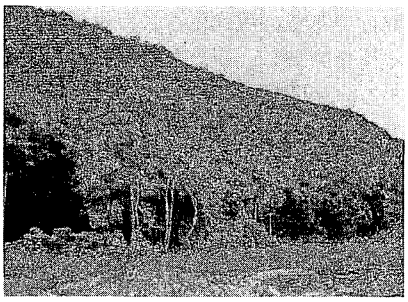


写真54　玉章風さんのゴム林（製陶工場に後背）［曼閣村］

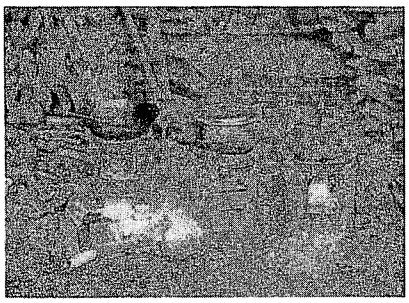


写真46　借家人の厨房（中華鍋，アルミ鍋等）［曼斗村］

写真50　店舗で電気窯が販売されている様子［孟遮鎮］

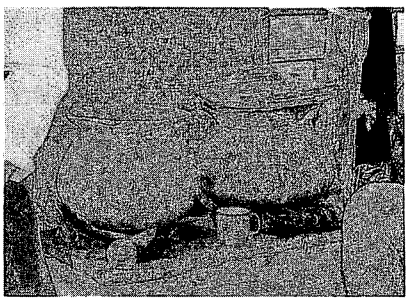


写真55　玉児蘭さん宅２階のテラスの水甕［曼朗村］

写真47　玉章さん宅の厨房（中華鍋とアルミ甑）［曼扎村］

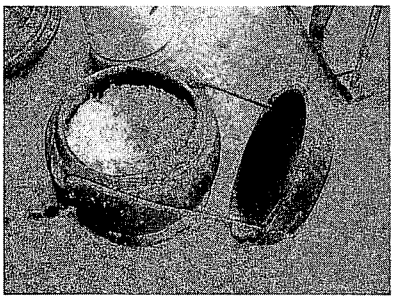


写真51　玉さん宅の糯米［曼朗村］

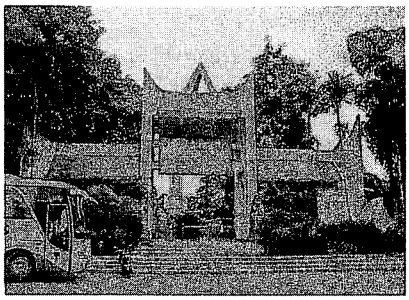


写真56　西双版納民族風情園（公園型観光施設）［景洪市］

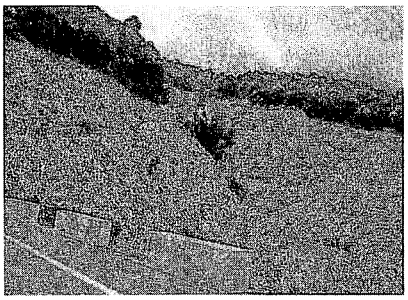


写真52　孟海鎮から曼扎村にかけてのトウモロコシ畑

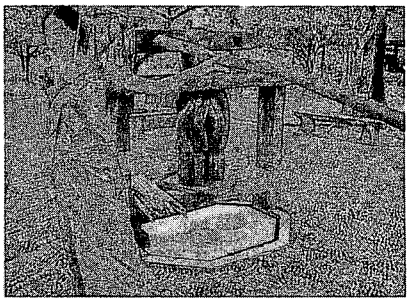


写真57　西双版納泰族園の甘蔗圧搾機とガイド［曼罕村］

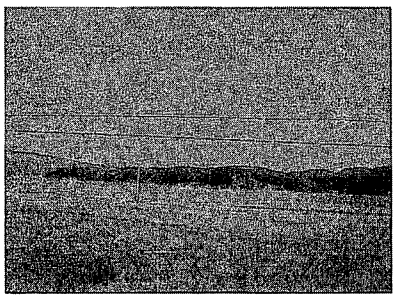


写真48　孟海鎮から曼扎村にかけての田地（３期作）

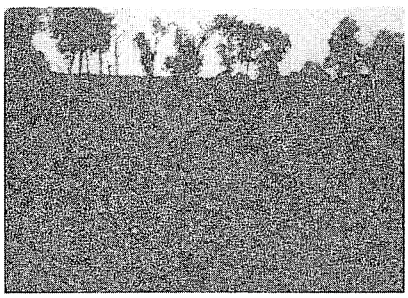


写真53　孟海鎮から曼扎村にかけての茶畑

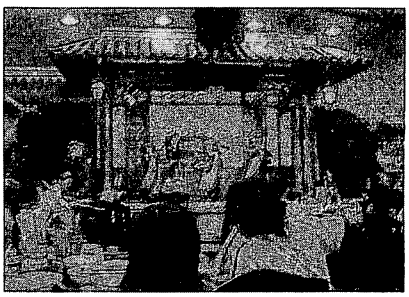


写真58　「椿香園」の歌舞団［昆明市］

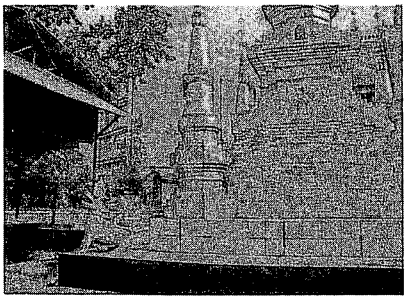


写真59　曼賀佛寺のパゴタと狛犬と托鉢［曼賀村］

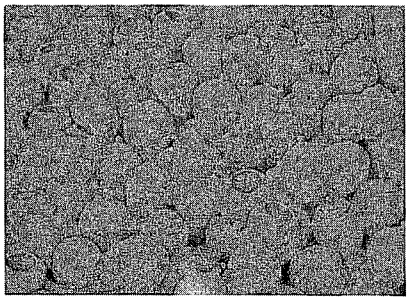


写真64　玉章風さんの新機種の小売用茶容［曼閣村］

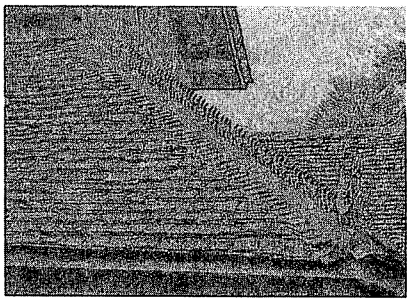


写真69　曼賀佛寺の飾陶瓦［曼賀村］

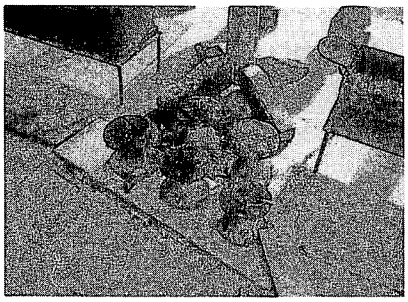


写真60　曼賀佛寺で使用されている台付灯皿［曼賀村］

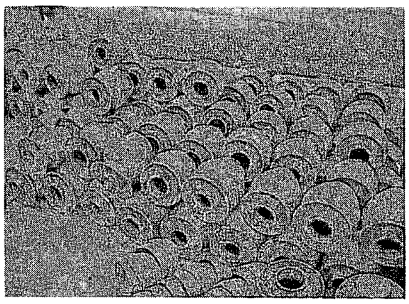


写真65　玉章風さんの新器種の漬物壺（酱）［曼閣村］

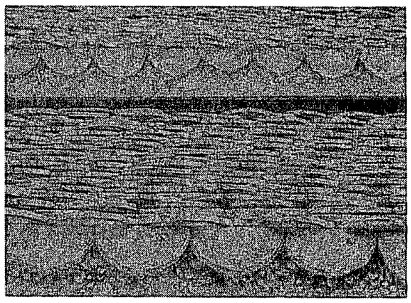


写真70　曼賀佛寺の飾陶瓦［曼賀村］

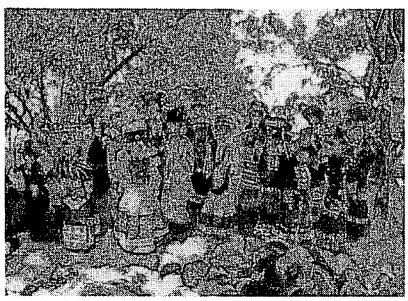


写真61　雲南省の少数民像衣装［昆明市］

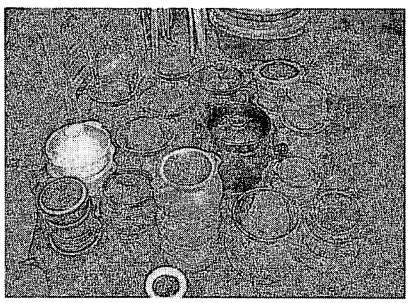


写真66　允景洪集貿市場の店舗にある漬物壺［景洪市］

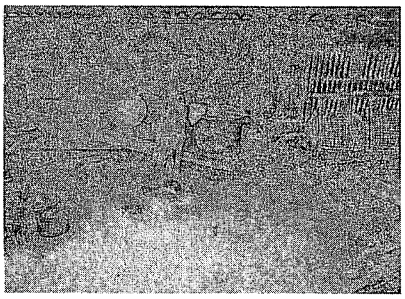


写真71　玉孟さんの工房［曼斗村］

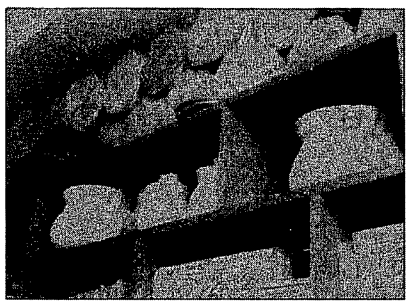


写真62　孟腊路の普洱茶小売店の曼朗村産鍋［景洪市］

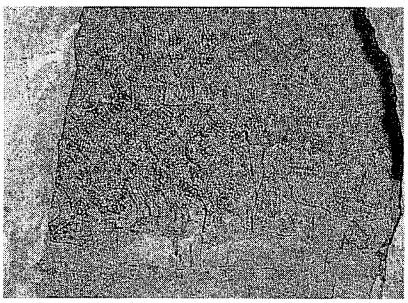


写真67　泰泐の寺院建築で使用する陶瓦［曼閣村］

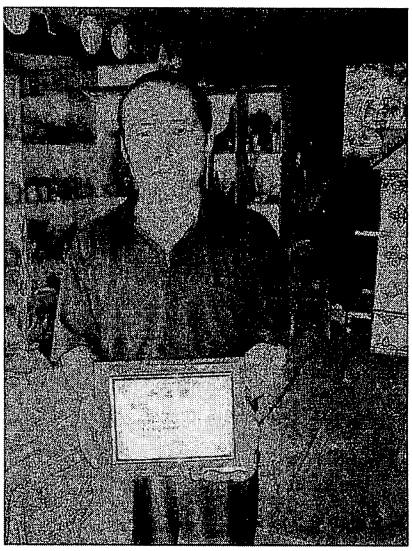


写真72「民族民間工芸伝承人」の称号をもつ岩罕濱さん［曼閣村］

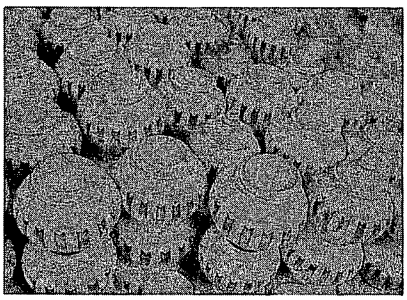


写真63　玉章風さんの新機種の台付香炉［曼閣村］

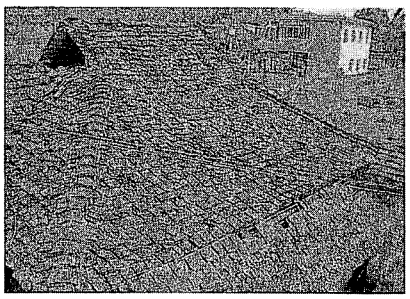


写真68　泰泐の住宅の屋根［曼扎村］

しかしながら、これを固辞して伝統的土器づくりに執着することを選択した。曼閣村とは対照的な判断である。その理由としては、機械を使うことで、製品が画一的になることや燃料消費や焼成破損も少ないという伝統的土器づくりの優位性を指摘していた。ただし、実際上、玉さん宅の敷地では、こうした各種機材を設置する場所がない（写真71）。また、泥窯と違って、窯の大きさにあわせて、成形体を量産しなければならなくなる。玉さんの受注量に対して、現代的土器づくりの量的優位性を活かせないと判断したのであろう

4－6　伝統的土器づくりの伝承と政府の保護政策

中華人民共和国成立後、文化大革命や開放政策を経験することで、ますます傣泐の生活が変容し、土器づくりの環境や条件も激変した。1973年、承包制によって、割り当てられた土地の生産責任を負う代わり、土地利用を自由裁量できるようになった。これによって、土器づくりを停止し、農業に転換した者も少なくない。また、曼閣村及び曼斗村の事例のとおり、都市計画によって、一旦割り当てられた水田を放棄させられ、土器づくりの基盤を失うことで、廃業した職人も少なくない。粘土をはじめとする原材料は、水田経営と切り離せない部分が大きい。曼閣村の製陶工場は勿論、曼斗村の玉さんも、粘土等の原材料を購入している。近年、薪の伐採制限等で、原材料費も高騰をはじめている。また、水田経営や土器づくりから手を引いて、労働単価がより芳しい異職種従事する者も激増している。後継者が輩出され難い理由がここにもある。

また、曼斗村の玉さんによれば、傣泐の土器づくり職人は、それぞれの技術を伝承することについて、あまり積極的でないらしい。これは、他人に対しては勿論、土器づくりをはじめようとする血縁者に対しても同様であるという。そのため、玉さんは、傍らで祖父を見真似ることで、土器づくり技術を習得した。また、ある人に土器づくり技術に関する教示を乞うたところ、戒められたという話を聞かされた。職人が減少した原因の一つとして、こうした事情があることを吐露していた。一方、曼扎村の玉さんは、他人から技術伝承している。関係の詳細は不明であるが、曼閣村の玉さんの祖母と曼斗村の玉さんのような雇用関係にあったのかも知れない。

また、４つの土器づくり世帯は、各村寨の高所得者層に位置付けられる。このうち、曼閣村を除く土器づくり世帯は、逼迫した家計でないことが、伝統的土器づくりから現代的土器づくりに脱却しなかった最大の理由であろう。男性の世帯主が中心となる家業や職業をもつことで、女性の配偶者が家事や家業の合間を縫って、土器づくりを継続できた。つまり、土器づくりが家計の中心になる必要がなかった。また、傣泐をはじめとする少数民族は、一人子政策による出産制限がないにもかかわらず、土器づくりの後継者が不在であることも、同じような経済的余裕に原因している。彼らの子息に共通することは、土器づくり職人以外の将来を望んでいることである。また、少数民族出身者の優遇措置もあり、異職種における登用が比較的容易になっている。伝統的土器づくりが存続した理由と土器づくりの後継者が不在である理由が同じ経済的事情に依拠していることは皮肉ともいえる。

伝統的土器づくりの継続性や後継者問題については、景洪市周辺と勐海県では、大きく事情が異なる。景洪市では、民族工芸品としてあるいは、新しい生活様式に合わせた現代的器種を創出することで、土器づくりが継続されるであろう。ただし、土器づくり技術そのものは大きく変容し、現代的土器づくりとして存続することになりそうである。

一方、勐海県では、景洪市に追従するかたちで、都市計画及び生活様式の漢族化、ないしは、現代化が進行している。これに伴って、生活基盤が整備され、什器用器種の代替と不要化がはじまっており、伝統的土器づくりの消滅が差し迫っている状況にある。

こうした少数民族の伝統文化の現状を憂慮して、中国政府、とくに、雲南省政府は、西双版納傣族自治州をはじめとする民族自治州および民族自治区を対象として、保護政策や具体的施策を拡充している。曼斗村では、玉さんを訪問した前日まで、傣泐の伝統的土器づくりのドキュメンタリー番組を制作するため、中国中央電子台（CCTV）が５日間取材に来ていた。観光資源としての伝統的な少数民族の文化には、熱い眼差しが注がれているようである。

雲南省政府は、1997年及び2001年、工芸美術、歌、舞、乐芸人を調査し、認定した。また、雲南省文化庁、省民委員会は、15前後の芸人分別を設けて、雲南省民族民間高級美術師、雲南省民族民間美術師等の称号や格付けを与えた。2003年から2005年にかけては、民族民間の音楽、舞踊、美術、曲芸、伝統工芸、伝統習俗を指定し、これにかかる伝統文化保存区及び伝統文化伝承人100名を指定した。土器づくり技術については、新石器時代から受け継がれた原始制陶技術と位置付け、曼閣村の岩さんと曼斗村の玉さんは、わずか19名の民族民間工芸伝承人に指定されている（写真72）。

5　おわりに　～伝統的土器づくりの行方～

今回、西双版納傣族自治州において、中国の著しい現代化を目の当たりにするとともに、傣泐の伝統的土器づくりの変容を確認することができた。わずか４つの村寨であるが、現地調査を敢行したところ、生産様

式や技術的な伝統性も喪失されつつあり、すでに、土器づくり職人そのものが淘汰されていた。伝統的土器づくりが存亡の危機に直面していること痛切に感じることができた。伝統的土器づくりを存続させるためには、最低限の生産を持続させなければならないが、金属製鍋及び電気釜が本格普及したことで、鍋、炊飯（湯沸し）鍋の需要を見込むことができなくなっている。やはり、政府の積極的な関与なくしては、伝統的土器づくりは消滅を避け切れない状況にある。

一方、曼閣村の製陶工場では、玉さんの世帯生業の中心が土器づくりであることから、その存亡を賭けて、斬新な取り組みが行われていた。伝統的器種の需要が下げ止まらないのであれば、伝統的器種を用途変更するしかない。顧客の生活事情の在り方を見据えることで、需要の底上げを図っている。また、伝統的器種の生産ラインを縮小し、現代的生活様式に適合した現代的器種を投入することで、新たな需要を掘り起こしている。植木鉢、漬物壺、茶容等の商品価値の高い新器種を打ち出すことで、大量生産・大量消費の現代的土器づくりに最適化することができたのである。

今後、現代中国で生き残るためには、生産様式や技術的内容も含めて、伝統的土器づくりから脱却し、現代的土器づくりへの転換を果たさなければならない。いずれにしても、伝統的土器づくりの急激すぎる変容に歯止めを掛けることはできそうにもない。

謝　辞

本調査では、余少剣（西双版納州文物管理所）・陳光旭・刀桂英（勐海県文化館）、劉芳（岡山理科大学大学院総合情報研究科社会情報専攻）が通訳を行った。

なお、現地調査のコーディネートにあたっては、下記の皆様よりご指導・ご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。

鄧聰（香港中文大学）・肖名华・侯麗萍（雲南省文物考古研究所）・李浩（西双版納州文物管理所）

主要参考文献

张季　1959　「西双版纳傣族的制陶技术」『考古』（９期）488～490頁

林声　1965　「云南傣族制陶术调查」『考古』（12期）645～653頁

傣族制陶工艺联合考察小组　1977　「记云南景洪傣族慢轮制陶工艺」『考古』（４期）251～257頁

周達生　1979　「中国タイ族の土器づくり～雲南省西双版納タイ族自治州～」『季刊民族学』８　国立民族学博物館　74～79頁

徐康宁　1983　「景洪曼斗寨傣族的制陶术」『西双版纳傣族社会综合调书（1）』（中国少数民族社会历史调查资料丛刊）《民族问题５种丛书》云南省编辑委员会编》　云南民族出版社　45～47頁

徐康宁　1988　「云南部分民族原始制陶工艺的再次考察」『云南民族文物调查』　云南人民出版社 190～210頁

クリスチャン・ダニエルス　1990　「雲南省西双版納傣族の製糖技術と森林保護～現地調査に見るその歴史」『就実大学史学論集』第５号　就実大学　232～302頁

尹绍亭　1991　『一个充满争议的文化生态体系～云南刀耕火种研究～』　云南人民出版社

クリスチャン・ダニエルス　1992　「大陸部東南アジア北部への中国生産技術移転～民国期シプソーンパンナー傣族の製陶技術を事例に～」『歴史と地理』第441号　１～14頁

クリスチャン・ダニエルス・渡部武編　1994　『雲南の生活と技術』（アジア文化叢書）　慶友社

瞿明安　1995　「城市化对西双版纳傣族社会生活的影響」『民族学研究』（中国民族学会编）第11辑　民族出版社　133～139頁

唐立　1997　「第１章制陶技术」『云南物质文化』（生活技术卷）　云南人民出版社　1～15頁

刘岩　1999　「傣族」『云南少数民族概览』（郭净・段玉明・杨福泉編）　云南人民出版社　202～247頁

尹紹亭（白坂蕃・林紅訳）　2000　『雲南の焼畑～人類生態学的研究』　財団法人農林統計協会

加藤久美子　2000　『盆地世界の国家論～雲南・シプソンパンナーのタイ族史～』　京都大学出版会

菅野博貢　2001　「シーサンパンナにおける漢族移入とタイ族～床下居住民の生活～」『流動する民族～中国南部の移住とエスニシティ～』（塚田誠之ほか編）平凡社　129～152頁

長谷川清　2001　「中華の理念とエスニシティー～雲南省徳宏地区タイ・ヌーの事例から～」『流動する民族～中国南部の移住とエスニシティー～』（塚田誠之ほか編）　平凡社　221～240頁

長谷川清　2001　「観光開発と民族社会の変容」『現代中国の民族と経済』（佐々木信彰編）　世界思想社　107～131頁

クリスチャン・ダニエルス　2002　「東南アジアと東アジアの境界～タイ文化圏の歴史から～」『境界を越えて～東アジアの周縁から～』（中見立夫編）　山川出版社

長谷川清　2003　「フロンティアにおける人口流動と民族間関係～雲南省、西双版納タイ族自治州の事例」『民族の移動と文化の動態～中国周縁地域の歴史と現在～』（塚田誠之編）風響社　239～291頁

李晓岑・朱霞　2005　「第１章陶瓷工艺」『云南民族民间工艺技术云南省』（社会科学院研究文庫）　中国书籍出版社　1～35頁

The Change of Traditional Pot-making and Its Technology in South-West CHINA

—The Pot-making Village in XISHUANGBANNA, CHINA—

Keiichi TOKUSAWA, Masashi KOBAYASHI* and Tomoko NAGATOMO**

Department of Socio-Information, Faculty of Informatics,
Okayama University of Science
1-1 Ridai-cho, Okayama 700-0005, Japan
** Department of Community Culture,*
Hokuriku Gakuin Junior College
イ-11 Mitukouji-machi, Kanazawa, Ishikawa 920-1396, Japan
*** Open Reserch Center, Otemae University*
8-7, Gomen-cho, Nishinomiya-shi, Hyogo 662-0965, Japan
(Received October 2, 2006; accepted November 6, 2006)

In our recent study we witnessed the modernization of Chinese culture and confirmed the transformation of Tai's traditional earthenware making. In a field study we found that their mode of production, and traditionality of techniques have been lost, and that even craftsmen are being under selection. Survival of the traditional earthenware making, even sustainment of minimum demand, has become impossible, due to popularization of metal cooking pans and electric rice-cookers. Extinction of traditional earthenware making is becoming unavoidable unless the government's active protective policy.

Meanwhile in modernistic pottery manufacturing factories, they were quick in departing from the traditional production of earthenware, brought to the market modern models that meet modern lifestyle, stimulating new demand. New articles with high marketablity, such flowerpots, pickle pots or tea containers are most suitable to mass production and mass consumption and helping the transference from traditional to modern earthenware manufacturing.

It seems not likely this too rapid transformation can be held back any more.